

第201回 整形外科集談会京阪神地方会
プログラム

日時：昭和59年5月19日（土） 午後2時30分開始
場所：住友道修町ビル7階大会議室（別紙地図添付）
発表時間：6分
抄録：400字以内の抄録を御提出下さい。

9. 踵骨隆起摧裂骨折の3症例

兵庫県立尼崎病院

整形外科 ○武田 信巳、芦田 一弥、池田 登

9. 踵骨隆起摧裂骨折の3症例

兵庫県立尼崎病院整形外科

武田 信巳・芦田 一弥

池田 登

3症例はいずれも閉経後の中高年齢（57才，53才，62才）女性で同様の軽微な外傷機転つまり足部をほぼ固定された状態で前方へ転倒しかけて足関節の背屈を強制されたものであった。発生機序については諸説あるが、Wilhelum は骨粗鬆症を基盤とした踵骨アキレス腱附着部の脆弱性と急激な下腿三頭筋の牽引介達外力との組み合わせ説を述べている。我々もマイクロデンシトメトリー法を用い骨粗鬆症の検索をし、その骨パターンより中等度の骨萎縮を認めたので subclinical にせよ骨粗鬆症の存在が示唆された。特に Charcot-Marie-Tooth 病を合併していた症例2は骨粗鬆症に弛緩性麻痺による廃用性骨萎縮が加わり、踵骨の脆弱性が既に存在し、さらに尖足位拘縮で下腿三頭筋が短縮していた所へ、左足部が冷蔵庫にひっかり固定された状態で前方へ転倒したため強い足関節の背屈を強制された典型例と考える。治療は螺子による観血的整復術を施行したが、横皮膚切開で術創の哆開した症例1，1本螺子で固定し再転位を生じた症例3により、我々は縦皮膚切開で踝部用螺子2本固定が適当と思われた。いずれにしても本骨折は関節外骨折のため予後は良好で、我々の症例でも術後日常生活上支障はなかった。